報 告

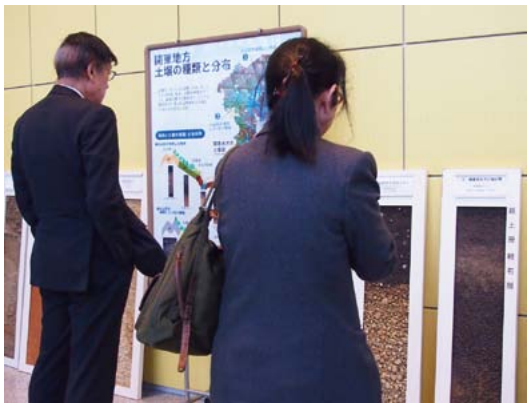
第5回農業環境インベントリー研究会
農業環境影響評価手法の開発をめざして

農業環境技術研究所は、「インベントリー」をキーワードにして、毎年研究会を開催しています。平成26年度は、「総合的な農業環境影響評価手法の開発」をテーマに、2月26日につくば国際会議場で開催し、試験研究機関、大学、民間企業、一般市民など100名の参加を得ました。

農業技術には、しばしば環境に対するトレードオフの関係が生じることが知られています。たとえば、土壌の炭素貯留をめざして水田の有機物投入を増やすとメタン発生量が増加するなどです。そのため、もちいる農業技術が、どのような便益や環境に及ぼす影響をもたらしているかを総合的かつ客観的に評価する手法が求められています。

農業環境影響評価手法を開発するには、多くの分野が参加する必要があることから、研究会のプログラムは、基調講演のほかに、Ⅰ部（行政施策における必要性）、Ⅱ部（環境対策におけるトレードオフ－LCAによる評価－）、Ⅲ部（生物多様性と経済評価）、Ⅳ部（エコバランス評価への取り組み）と幅広い分野に及びました。時間の関係で参加者の皆様のご意見を議論に十分に反映することができませんでしたが、「農業環境影響評価」への関心や興味が予想以上に高いことが感じられました。

（農業環境インベントリーセンター　神山 和則）



休憩時間には、恒例となっている土壌・昆虫標本の展示やポスターによる研究紹介を行いました

報 告

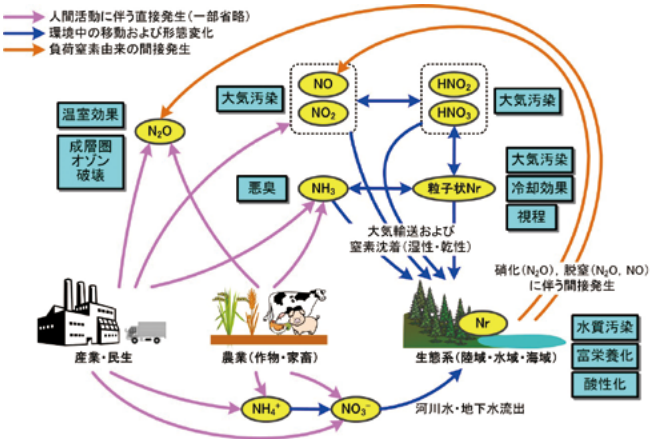
第32回土・水研究会
農業分野における反応性窒素過剰問題とフローの適正化への取り組み

農業生産にとって重要な窒素肥料は、強力な温室効果ガスである一酸化二窒素の発生、地下水の硝酸性窒素汚染、閉鎖性水域の富栄養化などの環境問題に深くかかわっています。また、国内の水質汚濁・温暖化問題にとって重要な畜産廃棄物中の窒素は、おもに輸入飼料（海外で施肥された窒素）に由来し、その適切な循環利用が求められています。

環境に影響をもたらしやすい窒素形態（アンモニア性窒素、硝酸性窒素、一酸化二窒素など）は、反応性窒素と呼ばれます。窒素肥料が窒素ガスから工業的に作られるようになって以来、反応性窒素は地球レベルで過剰となり、見過ごすことのできない問題となっています。

そこで、農業環境技術研究所は、2月27日（金曜日）に標記の研究会を開催し、窒素問題に関する国際的な動き、食糧の輸出入や食糧生産・消費に伴う窒素の流れ、窒素負荷に関する日本の農業の特徴・問題点・解決策などについての研究を紹介しました。研究会では、技術的な視点の議論（肥料の効率的利用、環境中に出た反応性窒素の循環利用や適正な配分など）とともに、食生活の選択（肉の消費）や食品ロスなどが重要であるとの議論があり、反応性窒素問題は私たちの生き方の問題でもあることを認識させられました。

（物質循環研究領域長　阿部　薫）



人為起源の反応性窒素がもたらす多様な環境影響
（林, 2014, 土水研究会資料より）